

すか？」と問いかけられ、余韻を残しつつ研修会が終了した。

かねてより、主体的なディスカッションによってもたらされる参加者相互の成長は、実践力を身につける上で不可欠であると考え、特に現場教育において、ほぼ我流で細々と挑戦してきた。上手く運ばず弱気になることもあったが、本日の研修で理論的支援をいただいたように感じた。講師も受講者も協働作業によりトレーニングを重ねていきたい。その先には、「自分の考えがひと磨き」されたソーシャルワーカーの姿が見える気がする。

● 学生向け講座

「いのちの講座—いのちに向き合う2日間—」

鈴木中人先生

(特定非営利活動法人 いのちをバトンタッチする会代表)

7月12日、19日の2日間にわたり、お子さんを小児がんでなくされた経験をお持ちの鈴木中人さんにお越しいただき、講座を開催しました。本学社会福祉学科の学生17名が参加しました。お子さんの死をきっかけに、お仕事をやめ、人が生きていく根源を見つめなおし、現在は全国を行脚し、いのちについて考える講演会や講座等で活動されています。「いのちをバトンタッチする会」がその活動拠点です。

本学社会福祉教育研究支援センター共催のゴールドリボンキャンペーン・シンポジウムのシンポジストとしてご登場していただき、小児がんで子どもをなくされた親の立場から、親の直面している現状や課題を語っていただいたのがきっかけとなり、このたびは、鈴木さんが企画された、当

事者ならではの視点からの問題提起を含む授業を開催することとなりました。私たちが学ぶ社会福祉の支援は、さまざまないのちのありようをわかりあい、いのちそのものにむきあう仕事でもあります。いのちについて学ぶことは、専門職としても根源的なことです。

当プロジェクトでは、**当事者がみずからの事例を用いて教育する先駆的な事例教育実践事例の一つ**としても注目しました。

【講師の鈴木中人さんから】

*プロフィール：1957年愛知県生まれ。1981年デンソー入社。2005年会社を早期退職し、当会を設立。全国で「いのちの授業」に取り組む傍ら、小児がんで死んでいく長女と家族の姿を語る著書「6歳のお嫁さん」「いのちのバトンタッチ」執筆。社会福祉士も取得されている。

「生きることの重さ、命の大切さをすごく感じて心が洗われました」「多くの体験や事例を通じていのちに向き合い、人間としての根っこができた」「この講座は本当に意味がある！ぜひ多くの学校で開催して欲しい」。

臨床いのちの講座を、同志社大学で初めて開催（7月12日、19日）しました。参加した学生の90%以上が「非常に良い内容」「他の学生にもぜひ薦める」など、アンケートにはいのちへの思いが溢れています。学生の真剣な姿に、本講座の確かな手ごたえと、大きな時代のニーズを感じています。

私は、長女を小児がんで亡くし、小児がんの支援活動（相談、グリーフケア等）などに取り組む中で、いのち・家族・生きる・死ぬ・大切なこととは何だろう？と思いました。その体験と思いを、全国の学校・地域・行政・企業などで、いのちの授業や人材育成セミナーとして語っており、全国で10万人の方が参加してくれています。

その中で、大きな危機感が生まれています。教育現場に、人間的資質を醸成するための教育機会が非常に少ないことです。大学や企業において、若者が生きることを真剣に考えていない、知識やスキル教育の前に人間教育をすべきだ、との嘆きの声？を伺います。一方で、どう生きる・何が本当に大切なことか考える語り合う教育を求め



ことがない、と若者は感じています。

今、生きることが大きく揺らぎ、自殺者が3万人を超え、人や社会の絆が崩れかけています。時代が揺れ動く中で、自分を見失い、生きる力を喪失しているようにさえ感じます。その根本策は、一番大切な“いのち”に向き合い、何を大切に思うか・どう生きるかを問う根源教育をすることに尽きる、そう思うのです。それが本講座です。

狙いは、特に、いのちを支える育てる専門職(医療・社会福祉職、教師、カウンセラー等)とそれを目指す学生に、確かないのちへの思いを育んでもらうものです。

内容は、“いのち”をキーワードに、生と死・いのちの真理・今日的課題(出生前診断、自殺、尊厳死・安楽死、在宅ケア、悲嘆、いのちの教育)などに向き合い、自分の生き方をみつめます。この中では、私の企業体験や社員研修の要素も織り込み、参加者の勤労観やキャリア開発にもなるように基本プログラム(90分/1回×15回)を考えてみました。

そして、専門職を育てる意味ある臨床講座にするために、(株)Panasonicから社会貢献事業の助成認定を得て、7月に同志社大学(社会福祉系)、9月に金城学院大学(心理系)と昭和女子大学(教育系)において、基本プログラムを2日要約版にして試行授業をしました。学生・院生・教授・専門学校の教務責任者・小中学校の教師や校長・教育会社の方々が参加され、今の社会にこそ本当に必要な取り組みだ、との過分なお言葉をいただきました。今後、志ある方々のお力やご縁を賜りながら講座化実現に取り組んで参ります。

現実社会が厳しく、価値観が多様化する時代にこそ、大学や専門教育の中に、いのちをみつめる、語り合う、実践する、そんな人間教育の小さな場が広がることを願っています。

【学生講座参加者の声から】

「将来、夢に気づいてもらえるサポートがしたい」

青島光里さん

(同志社大学社会学部社会福祉学科3年生)

私たちが生活をしている現代は、周りとのコミュニケー

在の価値や幸せがわからなくなっている人が多い。私は、心の豊かさを持つ人が最近は少なくなってきたと感じていた。自殺や殺人のニュースが行き交う世の中で私たち福祉を学んでいる者は、だれの命も尊重して生きてゆき、価値あるものであるということを世間に知らせていかななくてはならないと思う。しかし、それを示すことは言葉では簡単であるが、経験した者でなくてはその重みは伝わらない。その重みを今回中人さんの授業を受け、感じる事が出来た。この授業で私が一番印象に残った言葉は、「有限ある命」という言葉である。人には必ず死が訪れる。つまり、命は有限である。病気を抱えている人や高齢者はこの有限が他より明確に示されている。私も病を抱える身でそちら側の人間である。私の場合、有限に怯えるということよりも、期限までの先の見えない恐怖と闘っているというのが以前の私であった。この「有限ある命」という言葉を聞いたとき、私は、終わりが来るまで自分らしく生きたいと思った。期限があるのだから安心してもっと大きな心で自分を受け止めてあげてもいい、やりたいことをしたらいい、幸せだと思うことを精一杯したらいいと思った。恐怖に怯える毎日ではもったいなさすぎる。自分を解放することで他人の温かさがより一層見えてくるようになった気がする。どんな私も愛すべき自分だと思えるようになった。自分を大切にすることが他人を大事にすることに繋がる。もっと自分以外の人やものを大切にしようと思える。人は「死合わせ」で生きているからこそ幸せを見つけることができる。まさに死合わせ=幸せなのである。そして人は夢があるから幸せを求め。それ故に人間は恐怖や苦しみを感じ不幸になる。これをクリアすることで、私たち人間は幸せになれる。幸せは、一人で見つけるのではなく周りの人と見つけるから喜びが大きくなる、自分の居場所を見つけることができる。この連鎖は、私たちが生きていく上で大切な連鎖である。しかし、これに気付く人は少ないだろう。私は夢に気づいてもらうこと、そしてそれを叶えるサポートをMSWになってほしいと思った。この講座に参加してまた自分の夢が広がった。

しあわせは いつも じぶんの 心が きめる